

近代核家族はどこまで「近代的」か？

——一夫一婦制・性役割分業をめぐる進化論争からの示唆——

奈良大学 尾上正人

1 目的

本報告では、文化相対主義が批判されて、一夫一婦制や狩猟／採集という性役割分業の人類史貫通的普遍性が定説となりつつある現在の考古学・古人類学の到達点を敷衍・確認しつつ、他の大型類人猿にはないヒト（特に現生人類＝ホモ・サピエンス）の核家族の進化論的な成立根拠について考察し、旧来の社会学における核家族の「近代性」仮定を問い直すことを目的とする。

2 学問的背景としてのヒューマン・ユニヴァーサルズ

文化相対主義に強く立脚した人類学者マーガレット・ミードの、チャンブリ族における性役割分業の逆転の「発見」が再調査によって実証的に否定されたのが 1980 年代。その後の考古学・古人類学的研究においては、一夫一婦制を構成素とする核家族や性役割分業をいわゆる「ヒューマン・ユニヴァーサルズ」の 1 つと数えることをほぼ定説とした上で、その進化論的な生成論理をめぐる活発な議論が展開されてきたと言ってよい。だが進化論的視座を持つということは、必ずしもヒト以外の霊長類や大型類人猿の「家族」形成との連続性・延長上においてヒトの家族や婚姻のあり方を捉えるということの意味しない。むしろ一夫一婦制や性役割分業は、他の大型類人猿にはないヒト特有のものとして研究対象にされるようになった。

3 家族研究における食料供給・分配という観点の必要性

これまでの社会学における（核）家族論は、どのような理論的立場を取るにしろ、男女の性愛および育児（いわゆる社会化）を軸に展開されてきた感があるが、それはパーソンズ等を通じたフロイト理論の移入と無関係ではなかろう。しかし、ジャレド・ダイヤモンドがフロイトを批判して言うように、人類史の大宗を占め、また今日の我々の脳の構造や思考様式・社会関係の基礎が築かれた狩猟採集時代においては、性愛の相手を見つけることよりも食料調達と分配（による生存）が喫緊の課題だったのであり、核家族の生成論理もこの観点から再検討がなされてきている。例えばオーウェン・ラヴジョイは、二足歩行化と脳の肥大化・消化器官の縮小等による難産化・育児期間の延長が、ヒトの男をして狩りの獲物（肉）をホームベースで待つ女と子どもに分け与える性役割分業を生ぜしめ、発情期の消滅が男を疑心暗鬼にさせて女を恒常的に監視するシステムとしての一夫一婦制を招来したと説く。これにレヴィ＝ストロース流のインセスト・タブー解釈を付加する山極寿一は、一夫一婦制を敷いて類人猿に見られるようなオス間の性淘汰競争を抑制して男たちの政治的同盟を作れたことが、更新世の厳しい食料事情・気候変動や部族間戦争を我々の祖先が生き延びることができた主因だったとする。また、ラヴジョイ説に反発するフェミニズム的潮流は、むしろ女の側が主導権を握って、欺きの月経や集団内の月経同期化などによって移り気な男を特定の女と子どもに関係固定し長期投資させる適応戦略で一夫一婦制を作り上げたと説明した。この説明は、いわゆるマキャヴェリの知性仮説の圏内にあるものでもある。

4 解剖学的近代性と「近代性」

約 10 万年前のアフリカにおいて、解剖学的に近代的（modern）とされる集団が誕生したとされ、彼らと我々は思考様式・能力もほぼ同一であると見なされるようになった。核家族もまたこの時期より以前からのヒト社会に普遍的な産物であるとするれば、それを社会学的意味で「近代」家族と称する意味は果たしてどれだけあるのだろうか。第一次集団研究としての家族研究はこの、解剖学的近代といわゆる「近代性」を区分することの意義の有無が今、最も鋭く問われている領域の 1 つと言えるだろう。